

小樽女子短期大学 ニュージーランド研修旅行記

佐藤 幸子

本学は小樽の姉妹都市ダニーデンのオタゴポリテクニク・スクールと姉妹校関係にあり、1991年2月、はじめて同校への研修旅行を実施した。1994年2月、筆者は同校への第4回研修旅行に63名の学生を引率した。1989年カンタベリー大学(NZ・クライストチャーチ)への留学以来、これまで5回NZを訪れているが、学生の引率ははじめての経験であり、万全の準備を期した。

学校側としては迷惑な行為はつつしむ旨の誓約書を提出した学生に参加を許可した。語学の準備はもとより、異文化に対する心構え、具体的な旅の準備、そして相手の国から学ぶだけでなく、日本の文化を相手に伝えることが重要であることを彼らに述べた。

(1) 事前の準備

a. 学校としては63名全員の学生を対象として、後期毎週木曜日の昼休みに30分のオリエンテーションを持った。その内容は以下の通りである。

1. 旅行会社からの話し
2. 旅行者のマナー
3. 英会話
4. トラベラーズチェックなどについて
5. NZの青年との交際のマナー、セックス、エイズの問題
6. 前年度参加学生の経験談
7. 前年度引率教師よりの注意
8. 異文化を理解するために

また特記すべきことと思うが、初めての試みとして、全員健康診断を受け、一人ひとりの学生に必要な独自の薬を用意させた。そして引率教師は彼等の健康診断の結果の記録を携帯した。これは真に素晴らしい準備であった。

b. 63名の学生を2つのグループに分け、グループ1 32名、グループ2 31名とし、筆者はグループ1を引率したので、グループ1については独自に様々な準備をした。12月の木曜日5講時にオリエンテーションを持った。そして、最後の締め括りとして、本学としては始めてレストランで結団式を行った。学生達はほんとうに楽しいひとときを持ち、心を一つにすることができた。最初に出発までのスケジュールを渡しておいたが、その後は冬休みに入ったので、必要に応じて連絡事項、注意事項などを学生に直接郵送した。特にスキー遠足の直後であったので体力をつけておくこと、また定期試験に落第点を取らないように充分勉強するように注意した。

オリエンテーションの最初に、この旅行について考えるひとつのきっかけとすべく、次の3点について作文を書かせた。

1. ニュージーランドで何を学びたいか。
2. ホームステイ先で学びたいこと、また日本人としてどう振るまいたいか、トラブルが起き

た時どう処理するつもりであるか。

3. この旅行について事前の準備はどの程度しているか。

c. 具体的な内容としては、NZ という国や文化についての研究、旅行中の心がまえ、英会話、潮音頭、折り紙、茶道、日本舞踊、着付け、細かな旅行の準備へのアドバイスなどをふくんだ。

イ. NZ についての研究

NZ や NZ 文化についての本を紹介すると共に、筆者が新聞、雑誌に書いたプリントによって説明をした。すでに講義においてニュージーランドに関する作品にふれている学生もかなりいた。

ロ. 旅行中の心がまえ 以下のことをプリントにして渡した。

1. 話しを注意深く聞いて、伝達事項を間違えないこと、どんな場合も冷静に対処するよう心がけること。
2. 集合時間の5分～10分前に必ず到着していること。
3. マナーに気をつけること。
4. 人に頼らず、何事も自主独立の精神をもって解決すること、但し健康問題については、友人と相談し、しかる後、引率者に申し出ること。
5. 美しい思い出を作るために、ベストを尽くすよう心掛けるように。

ハ. 英会話

勿論日頃の英語の勉強が一番大切であるが、特にホームステイ先で必要な英語に関する本を読んだり、携帯するよう勧めた。

ニ. 潮音頭

グループ1はサマーフェスティバル(2月20日)とぶつかるので、参加するべく潮音頭を習うことにした。小樽からダニーデンに行く親善使節団はサマーフェスティバルのプロセッションに参加するが、歩くだけで踊らないことが多いのでダニーデンの市民は失望するとのことを聞いたが、我々はプロの日本舞踊家に依頼して、体育館で本格的に練習した。

ホ. 折り紙

折り紙の素晴らしい才能を持った知人から学生達はあらゆる種類の折り紙を習うことが出来たのは幸運であった。かなり豪華なものもあったので、学生達はステイ先やお世話になったポリテクニクの先生へのお礼として、作って差し上げることが出来た。

ヘ. 茶道

筆者がクライストチャーチに留学した時に、持っていった茶道のお釜をそのままおいてあったので、茶道部の学生を特訓してもらい、人前でたてる所までこぎつけた。1名がたて、1名がお正客、1名が茶道の歴史を英語で述べ、筆者がお点前の要所要所で説明を加えることにした。

ト. 日本舞踊

学生から希望者を募ったところ、3名の学生が申し出で、潮音頭の指導をしてくれた先生のところで個別に特訓を受け、“必ず仕上げます”と言う先生に未経験の彼女らの指導を委ねることにした。

チ. 着付け

全員の学生がプロの着付けの先生から着物の着かたの指導を受けた。

リ．旅行の準備

スリッパ (NZ にはあまりない)、パジャマから始まって細かい携帯品やお土産へのアドバイスなど学生の質問を受けつつ、説明の時間を待った。

(2) 研修内容

a. 前半 2 週間はダニーデンで、後半 2 週間はクロムウエル分校（ダニーデンからバスで 5 時間位）で授業を受けた。

午前中は全員必須の英語の授業が行われた。ほぼ月曜から金曜まで、ダニーデン校では 6 回、クロムウエル校では 7 回、合計 13 回行われた。

b. 午後は選択科目が行われた。

ダニーデン校では、以下の 13 科目が用意されていた。

1. Office Practice

受け付け、事務処理、その他オフィスワーク

2. Front Office Skills For Tourism

電話交換、レセプション、その他ホテル業務

3. Word Processing/Keyboarding

ワープロ訓練

4. Computing

コンピュータ訓練

5. Painting

ダニーデンの有名な画家の指導によるスケッチ、水彩

6. Pottery

粘土で焼き物の制作

7. Screen Printing

Tシャツなどのデザインやプリント

8. Art Appreciation

ダニーデンや近郊の美術館の名画や現代の絵画の研究

9. MAORI Language and Culture Studies

マオリの言語と文化の研究

10. History of Otago (and New Zealand)

初期移住者博物館などを訪れてオタゴの歴史を研究

11. Photography

写真の写しかた

12. Video Production

自分で書いた脚本でビデオ制作

13. Drama Class

発声、演技の練習や劇場見学

あらかじめ出発前に取った希望にしたがって、Photography (9 名)、Pottery (11 名)、History (12 名) の 3 クラスに分かれた。

1. Photography

息をのむような美しい海岸 Tunnel Beach,そしてその帰りに St. Claire Beach を訪れ、さらに花の咲き乱れる植物園やマオリの集会所に出かけて写真の写しかたを学んだ。

2. Pottery

粘土で器を作ったり、色のつけかたを学んだが、作品はいずれ焼き上がって送られてくることになっている。

3. History

Otago Museum, Early Settlers Museum, Port Charles and Mapouhahi (海岸) を訪れ、ニュージーランドの歴史を学んだ。

クロムウエル校では全員が4グループに分かれ Aqua Pass & Water Safety, History of Cromwell, Taha Maori, Food Service の4教科を1回ずつ受講した。

1. Aqua Pass & Water Safety

水泳と溺れた場合の対処の仕方 (プール使用)

2. History of Cromwell

クロムウエル (前掲) の歴史 (クロムウエル博物館訪問)

3. Taha Maori

マオリの文化 (マオリの歌や綾取りなど)

4. Food Service

ナイフ、フォークの磨き方、並べ方、ナプキンのたたみ方

(クロムウエル校には観光学科があり立派なレストランを持っているので、そこで学生達は実地訓練を受けるのである。また時にはそこで我々に夕食を供してくれることもあった。)

(3) 英語の授業について

授業のやり方は実に良く工夫されていて、学生たちは目を輝かして熱中していた。その中で特に興味深く思われたものについて説明したい。

1. ここでの授業は全般的に非常に practical で、今日からすぐ使われなければならないものから教えていくのである。しかもそれはきちんと体系化されていて、どんな場合にも対応出来るように作られている。配布されたプリントを見ると、日本の英会話のテキストがいかにも気紛れな作り方をされているかということに気づく。

2. 内容はごく日常的なのだが、ちょっとした工夫で目新しい印象を与え、学生を非常にひきつけるのである。

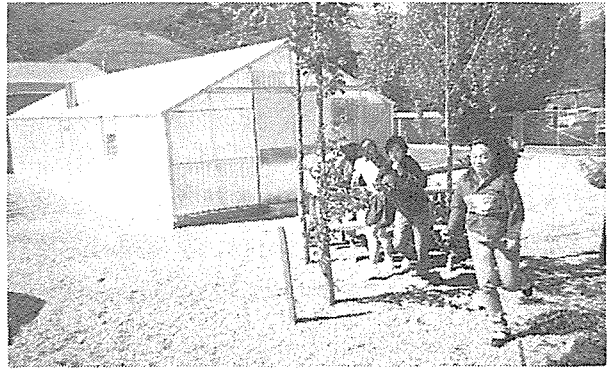
a. たとえば料理に関する用語を学ぶ授業時間には、大きなテーブルの上に台所道具が並べられてある。卵泡立て器、おろし器、しゃもじ、ボール……などさまざまな台所道具がきれいに並べられてあって、これから料理に関する英語を学ぶのだぞという気持ちに学生達をひきつけていく。そうして料理をする時に必要な用語をまとめて教え込んでくれるのである。

b. 身の上相談のようなことをする授業時間があった。この場合も内容的にはそう特殊なことではないのであるが、そのやり方の旨さに感心した。まずテーブルのまわりに横向きに座って、前の人の背中にはった紙に自分の悩みを書く。それを回収して読み上げ、それに対してみんながその解決方法を考えてあげるのである。たとえば

“I can't speak English well.” という悩みに対して誰かが手を上げて “Work hard.” というのである。



英語の授業：前の人の背中に自分の悩みを書く



記憶力ゲーム：外のテーブルに問題をおく

また “I don't have any boy friend.” というのに対しては，“Be more charming.” とか “Wear a pretty dress.” とか幾つかの答えが寄せられる。

みんなが輪になって前の人の背中に貼った紙に自分の悩みを書く，というたったこれだけの動作でクラス中がエキサイトするのである。もしこれが机に向かって書いて提出するというやり方であったら，学生達がこれほど生き生きと反応したかどうか疑わしい。

- c. 月曜には大抵ホストファミリーとどんな週末を過ごしたかを話させられる。また，例えば前日クルーズに出かけているいろいろな鳥を見た時には，まだ記憶が新鮮な次の授業の時間に，その鳥に関するプリントを渡されて様々な質問をされるのである。
- d. そういう中で秀逸だったのは，記憶力ゲーム（？）のようなものである。教室の外に机を置いてその上に10行ほどの英文を書いた紙を置いておく。学生達はA, B二人のグループを作る。合図でAが走り出して，外の紙に書いてある英文をなるべくたくさん暗記して戻ってきて，Bに教える。Bはそれを正確に書くのである。Aはまた外へ走り出て，続きの文章を暗記して戻ってきて，Bに教えるのである。それはもう大変な騒ぎであった。こうして一定時間(10分程度)を経過したところで用紙を回収して採点し，1位，2位，3位を発表するのである。その時の担当教師は見学していた筆者に採点を依頼したり，チョコレートの景品を用意したり，厳しいところのある人ではあったが，いつも硬軟両用見事に使い分けていた。

(4) 行事について

学校の授業以外に幾つかのイベントがあった。

1. Berbecue party

ホストファミリーも出席してマオリの歌や踊りで歓迎パーティーをしてくれた。

2. Otago Harbour Cruise

船でオタゴ湾を周遊，アホウドリやペンギンを見た。

3. Arrowtown

アロウタウンは古い歴史的背景を持つ町である。かつて金鉱で栄え，まるでアメリカ南部に見るような独特な風情のある町で，そこの博物館を見学して金鉱の歴史を学んだ。

4. Queenstown

美しい保養地で買い物や遊びにたいへん適した所であったので，数回訪れた。

5. Berbecue picnic

大きな河のほとりでポリテクニクの先生方と学生達がバーベキューパーティーをしてくれた。

6. サマーフェスティバル

フェスティバルの前日ポリテクニクの教室を借りて着付けと踊りの練習をした。当日はあいにく大変な雨と風であったが、学生達は寒さにもめげずダニーデンのメインストリート・クイーンズストリートを踊り抜いた。

(5) ホストファミリーとホストスチューデントについて

a. ホストファミリー

たくさんの日本人学生がニュージーランドに勉強に来ているが、ホストファミリーに関してさまざまな問題があるらしい。しかし幸いにして本学の場合は両校のきめ細かな努力の結果、ほとんど大きな問題は無い。問題の生じたファミリーは次の年には変更するのである。選びを選んで良いファミリーを用意している。

関西のある大学の場合、学生達はツアー・コンダクターも教員も同行せずにオタゴポリテクニクに来ていたが、いろいろ問題が生じているとのことであった。多額の費用をかけて外国に勉強に来ていながら、その国に対して良い印象を持って帰国できない結果となつては、お互いに不幸なことだと思うのだが。

ホストファミリーに対するポリテクニク側の対応は実に行き届いている。初日に学生とファミリーの双方に綿密な書類が渡される。その内容は授業の詳しいスケジュールから始まって、送り迎え、病気、長距離電話、洗濯などホームステイをする時に生じると思われるあらゆる問題についての適切な指示が含まれている。

b. ホストスチューデント

本学学生4人にポリテクニクの学生2,3人がホストスチューデントとして付き添ってくれた。グループによって対応の仕方は様々であった。大変うまくいったグループの場合はホストスチューデントの寮や家庭に招待されたり、買い物に付き合ってくれたり、長い夜(9時頃まで明るい)をバレーボールや折り紙に興じたりした。しかしグループの他の人達を無視して1対1で個人的に交際した為グループ全体にとってはホストスチューデントの役割が旨く機能しなかったケースもあり、これは事前に指導が必要と思われる。

(6) おわりに

この研修旅行に参加した学生達は、一人ひとりの胸に一生忘れられない大切な思い出を刻んだことだろう。これほど充実した中身の濃いプランに仕上げるまでには、両校の関係者はどれほどの苦勞と試行錯誤を繰り返したことだろう。

学生達が習った折り紙にはかなり豪華なものもあって、ステイ先やお世話になったポリテクニクの先生へのプレゼントとして、その知識を



コモナルームでお別れパーティの“桜”の練習

役立てることができた。最後のフェアウエルパーティー（ダニーデンとクロムウエルの両校で行われた）では特訓を受けた茶道を立派にしとげ、また日本舞踊は“必ず仕上げます”という先生の言葉通り、経験のない学生達が見事に“桜”を踊った。それはほとんどのポリテクニクの先生達やホストファミリーの人達にとって、はじめて目にする日本文化であった。彼らにどんなに喜んでいただいたかは、私達が帰国すると、早速ポリテクニクからお礼のファックスが入ったことで、良く分かるのである。ダニーデンの新聞には2回取り上げていただいた。Otago Daily Timesにはクロムウエルでの寮生活の様子を、そしてCommunityNewsにはサマーフェスティバルでの潮音頭の行列を載せていただいた。

学生達は英語を話すことに次第に慣れてきて、ダニーデンで2週間を過ごして、クロムウエル校に移動する途中寄った保養地のクイーンズダウンでは、インストラクターに自分達で電話してホテルまで迎えに来てもらい、パラグライダーを楽しむ学生達もでてきた。僅か一カ月の英語研修ではあったが、英語を使って意思を疎通させる醍醐味を知ったのである。日本に帰れば英語は少しずつ遠くなっていくかもしれないが、素朴なニュージーランドの文化や、おおらかでいながらシャイで品の良いところのあるニュージーランド人の暖かな親切は、彼女らのこれからの生きる姿勢に少なからぬ影響を与えていくことだろう。学生達は自主独立の精神をもってしっかりと行動してくれた。私は旅行中ついに一度も叱る必要はなかった。

1994年度からは、“海外事情”として理論と実践という形で、後期半年講義をうけた後、NZ研修旅行を実施して、単位を認定することになった。勿論幾つかの問題点はあるが、それらをより良い方向に改善して、これからもこのNZ研修旅行を小樽女子短期大学の特徴の一つとして、大切に育てていきたいものである。



Students from Dunedin's Japanese sister city, Otaru, currently studying in Dunedin at the Otago Lguage Centre, took part in the parade with a traditional Japanese dance. The students are from Otaru Junior Women's College.

Community news：サマーフェスティバルで潮音頭をおどる